

第22回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ⑤

「日韓高校生交流キャンプ 感想」



土屋 遥

埼玉県立越谷南高等学校 3年

私がこのキャンプに申し込んだ理由は、受験生としての夏休みを机の上の勉強だけで終わらせず、海外に行き、多くの人と出会うことで自分の世界を広げたいと思ったからだ。

韓国のことを詳しく知らなかった私は、ニュースなどを見て MERS や領土問題のことを知り、少し不安になったけれど、行ってみることが、一番相手国のことを理解できるだろうと思い、申し込んだ。合格の連絡がきた時はとても嬉しかった。

7月27日、羽田空港の集合場所に着くと、すでにたくさんの参加者がいた。しかし、ぎこちない会話しか交わせず、これからさらに言葉の通じない韓国の学生も加わるのかと思うと心配だった。

その日の夕方、初めて韓国学生と対面し、自己紹介、チーム名、アイテム構想などを話し合った。驚いたのは韓国学生の英語力の高さだった。考えていることを素早く英語にすることに慣れているようで、さらには考えていることも高尚だった。チームメ

イトには日本語を話せる韓国人もいて、挨拶程度の韓国語しか知らない私は初日から勉強不足を痛感させられた。

2日目、韓国の街に出て現場体験をした。ソウルはとても栄えていて、高層ビルが多く、おしゃれな印象を持った。

私たちのチームの事業カテゴリーは「流通販売サービス」だったので、「ロッテワールドモール」を訪れた。広報館・水族館施設の見学や（現在建設中の）ロッテワールドタワーが作られることによる経済効果についての講話を聞き、事業にいかせそうな情報を得て会場に戻った。

私たちのチームは「ピーポーヘルプスイッチ」というドアノブを事業アイテムにすることに決めた。これは日韓両国の問題である「高齢化」に着目し、一人暮らしのお年寄りの孤独死を減らすことを目的とするアイテムだった。このアイディアは韓国人の男子学生が出してくれたもので、早い段階にみんなで具体化していくことができた。

3 日目、アイデアを商品化し、さらにどのように販売していくかを考えた。商品のアピールのため、CM の撮影も行った。チームメイトに映画製作部だった人もいて、とてもスムーズに撮影ができた。ここでも韓国学生の能力の高さに感心させられた。キャッチコピーの決定、ブースの飾り付け、具体的な売り上げ見込額など、それぞれが考え、伝え合い、時には相手の意見に批判をして行く中で、私たちはより良いチームになっていった。気付けば、自分の意見を伝えるのに必死で言葉の壁のことなど忘れていた。

4 日目、今日はいよいよ、発表の日。みんなで話し合い、まとめた事業アイテムについて、それぞれがきちんと説明できるほどに理解していた。投資家の方々にアイテムの良さを知ってもらうため、一生懸命プレゼンをした。時には「他のセキュリティ会社と何が違うのかわからない」「お年寄りの方々にどのようにこれを売り込むつもりなのか」など厳しい意見をいただき、それらへの改善策、解決策を考えることが私たちのアイテムをより良いものへと磨いてくれた。

プレゼンの時間が終わったときはホッとしました。毎日朝早くから夜中まで考え続け、みんなとても疲れていた。それでも、最優秀賞の発表で、私たち「チーム 3」の名前

が呼ばれた瞬間、疲れは全て吹き飛んだ。常に妥協せず、深くまで考えた私たちのアイデアが認められたことが嬉しかった。

その夜は、チームのみんなが集まって、遅くまでおしゃべりをした。初日のぎこちなさが嘘のように楽しかった。4 日間でこんなに仲良くなれるのかと思うと同時に、明日帰るのだという寂しさもこみ上げてきた。

5 日目は、仁寺洞を観光し、韓国伝統の鏡の飾り付けなども体験した。昼食を終えたら、もう空港に向かう時間だった。別れ際には、またチーム全員で会おうねと口々に言い合った。

近くて遠い国、韓国。そういわれる時代も、もう終わると思う。少なくともこのキャンプに参加した全員が互いの国のことを大切にしたいと思ったことだろう。私は、日韓国交正常化 50 周年の節目の年に、このキャンプに参加できて本当に良かった。

一生付き合いたいと思える友人を得たこと、自分はずっと勉強しなければいけないと痛感できたこと、日本と韓国との関係は良くなると確信できたこと、そして自分の夢を明確に持てたこと。どれもかけがえのないもので、ずっと大切にしていきたいと思う。

「遠くて近い国、日本」



尹 智旻(ユン・ジミン)
豊文女子高等学校 2年

「JKCampに参加できる！」初めてキャンプに参加できることを知らされた時、参加できるという事実だけで本当に嬉しかった。いろんな理由があったと思うけれど、私にとって一番嬉しかったのは、日本の高校生に会えるということだった。去年、学校で実施した日本文化交流プログラムに参加し、埼玉に住んでいる日本の高校生と友達になれた経験があり、日本語を上手に喋られなくても日本の高校生といくらでも仲良くなれるという自信を得ることが出来たので、今回のJKCampでも新たに日本の友達を作り、一生続くような絆を結びたいと思った。数週間が経ち、いよいよ待ちに待った7月27日を迎えた。

初日、キャンプ会場の「ハイソウル・ユースホステル」に到着すると、すでにうちのチームの韓国側メンバーがみんな集まっていた。韓国側メンバー同士もみんな初対面だったので気まずかったけれど、どこに住んでいるのか、どこの学校に通っているのか、また間もなく会場に到着する日本側の参加者について話をしている内に、短時間ですっかり打ち解けていった。しばらくして、日本の参加者たちが会場に到着した。

ものすごく緊張する瞬間だった。初めて日本の参加者たちと顔を合わせた瞬間、最初に口から出た言葉は、「うわ、本当にかわいい！本当に格好いい！」だった。日本の参加者たちのルックスがあまりにも秀でていて、うちのチームはビジュアルチームとしていけるんじゃないかなと思ったくらいだ。お互いに自己紹介をする時間には、はにかみながら簡単な挨拶しか交わさなくて残念だったけれど、その後、チームマガジンをみんなで作りながらお互いについてより深く知り合うことができた。チームマガジンにみんなが書き込んだメッセージを一つ一つ読むことで、みんなは何が好きで、韓国についてどんなイメージを持っているのかが分かるようになり、自然と話題も増えてきた。最後に、事業アイテムについて簡単に話し合いを行ったが、今まで私が考えたこともない様々なアイデアがたくさん出てきて、うまく意見調整すれば良い結果が得られそうな気がした。

二日目、私たちは早朝から韓国経済現場体験のために「ホンデ」にあるセブンスプリングス(ファミリーレストラン)に向かった。セブンスプリングスの企業運営方針や

追い求めている価値観はどんなものなのかが分かっただけではなく、チーム1のチームメイトたちと一緒に料理実習やサービス教育など様々な体験をすることが出来た。

「ホンデ」近くに住んでいるにもかかわらず、セブンスプリングスには一度も行ったことがなくて、これを機に、どんな企業なのかが分かったので、とても良い経験になったと思った。韓国経済現場体験が終わり、チームのお揃いのTシャツを買うために

「ホンデ」をあっちこっち歩き回った。本当にいろんなものがあったけれど、最終的にチェック柄のシャツを選んだ。

「ホンデ」で楽しい時間を過ごした後、ユースホステルに戻り、その日の最後の日程、「ゴールデンベル(勝ち抜きクイズ大会)」に参加した。日韓の学生が1:1、ランダムで選ばれた相手とペアを組むと聞き、だれとペアになるのかなとワクワクしていた。私とペアになったのは、チーム8のユウナちゃんだった。ユウナちゃんは韓国語が堪能で、コミュニケーションがとてもスムーズにとれた上に、二人の瞬発力と常識力をフル稼働させた結果、私たちはなんと1位になった。いまでも、優勝が決まったあの瞬間、嬉しさのあまり二人で抱き合った記憶が鮮明に残っている。あの時は最高に嬉しかったし、何でも出来そうな気がした。日本と韓国が力を合わせれば、あの時の私たちのようにものすごい力を発揮できるのではないかなと初めて思った。

そしてその夜、私たちは事業アイテムを最終決定した。グローバル化時代とされている今、外国の食べ物を味わうためには

専門店に行き、高いお金を払わなければならない。また、職人たちがゆっくり食事をする時間がないため、外国の食べ物を味わう機会がないということもふまえて、「世界中の代表的な食べ物をファーストフード化して提供するフランチャイズ企業」を立ち上げようというアイデアが出てきた。アイデアをより具体化させなければならなかったけれど、朝からハードな日程をこなしてきたせいかみんなが疲れていたため、次の日に決めることにして、二日目の夜を過ごした。

三日目は、目が回るほど忙しい一日だった。朝から前日にできなかった事業アイテムの具体化のため、細かいところをつめていくのに、思った以上に時間がかかってしまった。メンターの朴ウヌリさんが通訳をしてくれたおかげでたくさん助けられたけれど、メンターさんがいない時にも私たちはうまくコミュニケーションをとることができた。その理由は、英語が堪能な日本のメンバーがいて、韓国のメンバーたちが英語で彼に話をし、彼が他の日本のメンバーたちに日本語でその話を伝えて、またみんなの意見を聞くという形で話し合いを進めたからだ。これで100%コミュニケーションがとれたと言えば嘘になるかもしれないけれど、正直にいうと、私はこういう形で日本のメンバーたちとコミュニケーションをとるのがちっとも面倒だとか大変だとは思わなかった。かえってとても楽しかった。話し合いをしながら、隣の国の学生だとはいえ、私たちと全く変わらないんだと改

めて感じたし、素晴らしい意見がどんどん出てきたからだ。

事業アイテムの具体化が済んでから、私たちはチームを二つに分けて作業を進めることにした。一つは、事業ブースに書き込む内容と実際にお店で使うメニューの内容を決める組、もう一つは、事業ブースの全体的なデザインを決める組にした。事業ブース作りが本格的に始まってからは、その場に座ったままブース作りだけに集中しなければならなくなったので、ちゃんと休憩を取る暇さえなかった。その為、みんな疲れて大変なはずなのに、各自自分の役割を果たそうと精一杯努力して、事業ブース作りに取り組んでいた。作業を進めていく過程を通して、チームのみんなとより仲良くなれたし、キャンプのOBやスタッフの方々とも話し合いながら親しくなることができた。事業ブースがほぼ完成したのは、翌朝2時頃だった。すでに遅い時間だったけれど、私たちは当日開催される模擬投資のために必要な事業アイテムの分析及び長所と短所の把握をするため、半睡眠状態でみんな集まって最終まとめをした。その姿を見ていると、ここまで熱心に取り組んでくれるチームメイトたちに感謝すると同時に、私も一生懸命頑張ってみんなの努力が報われるような素晴らしい成果を挙げたいと思った。

いよいよ、待望の四日目になった。私たちは前日の夜に完成できなかった事業ブースを仕上げるために大急ぎでラストスパートをかけた。事業ブースが完成し、(模擬)

投資金を誘致するための事業発表会が本格的に始まった。朝方みんなで集まって話し合った内容を忘れないように、何度も頭の中で繰り返し確認しながら心を落ち着かせようとした。

投資家の方々が事業ブースを訪れてきて、事業アイテムについて興味を示してくれる度に、渾身の力を込めて説明を行った。私自信、体力に限界が来ていて、喋りながらも何を話しているのか分からなくなっていたけれど、私の説明を聞いてくれた多くの投資家の方々が私たちの事業に投資してくれたので、本当に嬉しかった。私だけではなく、全力で説明を行い、投資金を誘致しているチームメイトたちの姿がとても格好良く見えた。

私たちの事業は想像以上に好評を得て、多くの投資金を誘致することができた。表彰式の時には、多額の投資金を誘致できたうちのチームが表彰されるのではないかと、内心期待していたけれど、私たちは事業アイテムに関する賞はもらえなかった。代わりに私たちが受賞したのは、「人気賞」だった。人気賞はOBとスタッフの方々、そして他のチームの参加者たちがキャンプ期間中に一番楽しく活動をしているように見えるチームに投票して決める賞なので、たくさんの人たちがうちのチーム5を評価してくれたことに感謝を感じた。受賞のために壇上にあがった時には、喜びはもちろんのこと、チームメイト全員が丸丸となって頑張ってきた4日間のことを思い出し、この賞を受賞できたのは、投票してくれたみなさんだけではなく、チームメイト全員のおかげ

げなんだと心からそう思った。お互いに気を配って、事業ブース作りに熱心に取り掛かりながらもコミュニケーションを通して常に良い雰囲気を保ってくれたのは他ならぬうちのチームメイトたちだったからだ。壇上で賞をもらう短い時間の間、私は多くのことに気付き、感じる事ができた。

その日の夜、事業発表会に関する全ての日程が終わり、両国伝統衣装ファッションショーや特技披露など、フィナーレフェスティバルが開かれた。うちのチームは特技披露に参加し、クレヨンポップ(韓国アイドル)の「パパパ」のダンスを踊った。ダンスを練習する時には、恥ずかしいと尻込みしていたメンバーも舞台の上ではダンスを精一杯楽しんでくれた。練習時間が本当に短くて、ダンスは完ぺきというわけにはいかなかったけれど、他の参加者とは違って、チームメンバー全員が参加したということで、揺るぎない最高のチームワークをアピールできたような気がした。学校の友達でもなく、日本の友達と一緒に舞台上でダンスを踊ったというこの思い出は、きっと一生忘れることはできないだろう。

最後の夜が終わっていくのが寂しすぎて、眠い目をこすりながら、チームメイトたちと少しでも長く一緒にいようと頑張っていたことを覚えている。みんなで一つの部屋に集まって、夜遅くまでたくさんのお話をしながら遊んだ。韓国でいま流行っている「一人だけきれいな顔で、他はみんな変顔でサポートする」自撮りやみんなで変顔自撮り、またサングラスなどをかけて写真集みたいな写真を撮り合ったり、密集して座って真

実だけを喋る「真実ゲーム」をしたりした。この「真実ゲーム」は4泊5日のキャンプ期間中、一番笑いが絶えなかった時間だった。お互いの秘密を共有したことで、私たちチームメンバー10人だけの秘密袋が一つできたような気がした。この秘密袋は今度私たちが再会した時にいつでも取り出せる楽しい話のネタになるだろう。

最終日の朝。部屋に散らかしていた荷物を一つ一つ片付けていると、日本の友達との別れの時間が刻々と近付いてきている気がしてなんだか悲しくなってきた。みんなで真っ直ぐに仁寺洞(インサドン)に向かった。仁寺洞は韓国の名所であり、伝統的な街であるだけに、日本のみんなにたくさんのお話を見せてあげたかったし、教えてあげたかった。しかし、私たちが着いた時間が早すぎたか、開いているお店がほとんどなかった。それに、日本の参加者たちのフライト時間が迫ってきていたので、全てのプログラムが速やかに進められた。日本の友達がとても残念がっているように見えたので、なんだか申し訳ない気持ちになり、今度時間があるときにまた必ず遊びに来てねと声を掛けた。みんなで最後の昼食を食べ終わり、日本のみんなを見送るために空港行きの団体バスが待っているところまで移動した。スタッフの方から「日本の参加者は、後5分で乗車してください。」と言われた瞬間、あ、本当に別れるんだなと実感が湧いてきて涙が溢れてきた。私は泣きながら、こんな短い4泊5日の間にここまで

みんなと仲良くなれたことが不思議に思えてきた。

日本の女子メンバーたちがいつ買ったのか、韓国の女子メンバーのためにブレスレットを一つずつプレゼントしてくれた。そのブレスレットをはめながら、最後の挨拶をするために顔を上げると、私だけではなくチームのみんなが泣いていた。それを見た瞬間、うちのチームのムードメーカーだった日本のメンバーユウ君が最後にみんなに「パパパ」を踊ろうと言い出し、私たちは泣きながらその場で一緒にダンスを踊った。おそらく、このダンスはうちのチームのマスコットとして永遠に残るだろう。

日本の友達を乗せたバスが動き出し、その場に残った韓国のメンバーたちはバスが見えなくなるまで手を振り続けた。みんなが見えなくなったにもかかわらず、涙が止まらなかった。韓国のメンバーたちとその場で、今高3のテソンさんのセンター試験が終わる今年の冬に、みんなで日本に遊びに行こうと約束した。必ず日本にいて、日本のみんなとまた会いたいと思った。今私は冬がくることを、首を長くして待っている。

キャンプが終わった今、だれかにこのキャンプを通して得た物は何かと聞かれたら、私は韓国と日本の関係をながめる新たな視点だと答えよう。いまだに韓国と日本は政治面では対立している部分が少ないけれど、日本の友達と交流をしてみると、私たちは対立ばかりしている場合ではないと思った。日本は遠いけれど、私たちと絶対に切り離せない隣国である。私たちが今回のJKキャンプで力を合わせて一つの事を成し遂げられたように、日本と韓国が力を合わせれば、きっとアジアだけではなく、世界中にその影響力を及ぼす何かを成し遂げることができると思う。

私を一段と成長させてくれたJKキャンプに関わった全ての方々に心から感謝申し上げます。忘れられない最高の経験ができました。うちのチーム5！英語の専門家ソユン、私と息のぴったり合ったヨンジェ、たくさん助けてもらったトンヨン、恋愛相談に乗ってくれたテソンさん、笑顔の可愛いリカ、韓国アイドルが好きだというユウリ、思慮深いモモコ、運動神経抜群のレオ、人気最高のユウ、そして大好きなウヌリ・メンター、みんなありがとうございました！♡

「1+1」



佐藤 駿太

福島県立橋高等学校 2年

このキャンプを知ったのは先生の紹介でした。僕は国際関係の大学を志望していて、そのことを知っていた先生がこのキャンプを勧めてくれました。もともと外国の文化に興味があったのですぐに惹かれました。心配も多少ありましたがそれよりも得られるものが多いだろうと思い応募を決意しました。合格の連絡が来たとき、とても嬉しかったことを今でも覚えています。

しかし、出発が間近に控えた頃に変なことが韓国で起こりました。MERSの大流行です。日本のテレビでも大きく報道され、今僕が韓国に渡航して大丈夫なのかと、心配の声を家族や友人に多くかけられました。しかし、僕は何も言えずただニュースをみて韓国の状況を確認することしかできませんでした。今回のキャンプ開催が危ぶまれそうになったときにやっと流行が収まってきたとの報道があり、キャンプの開催も正式に決定し、ほっと肩をなでおろせました。

キャンプ1日目、無事韓国の空港に到着しそのままバスでユースホステルへと向かいました。その道中から見た外の光景はもう日本と全然違って、ワクワクと同時

に何か寂しさを感じました。

ホテルに着いたらすぐにオリエンテーションと開会式が行われました。オリエンテーションでは緊張して僕はあまりしゃべれなかったのですが、韓国の学生が知っている日本語なども交えながらしゃべりかけてくれたので、楽しく会話することが出来ました。また意見を交換し合うときには英語が使われ、韓国の学生が英語を流暢に喋っていたのをみてとても驚きました。

その夜、明日は知っている英語などを使い、もっと積極的にコミュニケーションを取ろうと決意し寝ました。

2日目は、韓国の市場調査を行いました。僕たちのチームはロッテワールドモールに行きました。ロッテワールドモールは大型複合施設で、有名なショップから映画館、水族館またホテルまである大きな所でした。

1通り見学したあと昼食をモールの社員食堂で食べた時、嬉しいことがありました。そこの麺はとても辛く僕は食べるのに苦労していました。そんなときに同じチームの韓国の学生が僕に大丈夫と甘いバナナミルクを買ってくれたのです。とても嬉しかっ

たです。その時に飲んだあのバナナミルクの味は、甘くて僕の舌の辛さを和らげると同時に何か心にくる温かいものがあり、今でも忘れられません。韓国の学生はとても優しいと韓国の見方が変わりました。

3日目はいよいよブース作りに入りました。昨夜出した案を練り直すことから始まったのですが、どんどん話が進んでいき全く新しいアイデアになってしまいました。そのため話し合うことが多くなり少し他の班より制作が遅れてしまいました。

そのせいなのか、日本と韓国の学生の間で意見が食い違ったり様々な問題が発生し、少し溝ができてしまいました。しかし作業をする中でお互いがお互いを手伝ったり、一緒に動画を作成する中で徐々に溝が埋まっていき楽しく作業することができました。

4日目、いよいよ模擬投資が始まりました。僕は自分のチームの事業に自信を持ってました。なぜなら最高のキャッチコピーを考えたからです。これが今回の題名でもある「1+1」です。1は韓国語で2通りの読み方があり、それが日本と韓国を表します。だから日本と韓国を繋げられるようなようにつけたのです。このキャッチコピーは模擬投資する皆さんにも伝えて賞賛の声もいただけたので、これは最優秀賞を取れたと思いました。

しかし、残念なことに賞に入ることはできませんでした。正直悔しかったですがやりきった達成感があったので悔いは残りませんでした。

その後、フィナーレフェスティバルが行われました。両国の伝統衣装のファッションショーなど、とても盛り上がっていましたが、そこで僕が応援団の演舞を披露することになりました。日本の応援が韓国の人にとってどう映るのかとても心配でした。しかし、ぐだぐだだったにも関わらず大盛り上がりになり、嬉しいことに1番盛り上げた人に貰える商品まで手に入れることができました。あの時の経験は忘れられません。終わったあとも、応援良かったよとたくさんの人にいわれていい思い出になりました。

フィナーレフェスティバルのあと最後の夜ということで、1つの部屋に集まって皆でゲームをして遊びました。本当に時間が止まって欲しいくらい楽しくて、深夜遅くまでずっと笑い合っていました。

最終日はあつという間に時間がすぎていってすぐに別れの時間となってしまいました。泣いている同じチームの皆をみて思わず僕もうるっときてしまいました。そしてその時、この5日間の出来事が走馬灯のように思い上がってきて、改めてこの5日間でどれだけ充実していたか思い出しました。

キャンプが終わって思うことは数え切れないほどあるが、このキャンプに参加できて本当に良かったと実感しています。たくさんの人と出会いたくさんの経験を得ることができました。今政治の世界では日本と韓国の間で冷たい風が流れていますが、それはそこだけの話で、韓国の学生は日本を馬鹿にしないし恨んでもいない、逆に僕の

ほうが韓国に対する見方が大きく変わりました。

僕はこのような活動を続けていけば必ず両国の関係は改善させると思います。この

経験をいかし、将来世界で活躍できる人になりたいです。

